

領域6合同オンラインインフォーマルミーティング 議事録

2022/ 3 / 19 (土) オンライン開催 18:00 ~ 19:00

記録者：古石貴裕

参加者：乾、北野、杉本、野村、古石、石黒、他

0 全体説明 (杉本)

Zoom の使用上の注意と意思表示の仕方に関する説明

1 委員について (杉本)

(ア) 次期領域代表・副代表の確認

① 次期領域代表 (2022 年 4 月～2023 年 3 月)

北野 晴久 (超伝導・密度派, 青学大理工)

② 次期領域副代表 (2022 年 4 月～2023 年 3 月)

枝川 圭一 (準結晶, 東大生研)

(イ) 次期運営委員の確認

古石 貴裕 (液体金属, 福井大工, 2021 年 10 月～2022 年 9 月)

石黒 亮輔 (超低温, 日本女子大理, 2021 年 10 月～2022 年 9 月)

廣戸 孝信 (準結晶, 物材機構, 2022 年 4 月～2023 年 3 月)

延兼 啓純 (超伝導・密度波, 北大理, 2022 年 4 月～2023 年 3 月)

(ウ) 次々期運営委員の推薦・承認

(今回の承認事項)

梶原 行夫 (液体金属, 広大院先進理工, 2022 年 10 月～2023 年 9 月)

長登 康 (超低温, 広大院先進理工, 2022 年 10 月～2023 年 9 月)

特に異論なく承認

2 日本物理学会 若手奨励賞 (杉本)

(ア) 第 16 回 (2022 年) 受賞者

① 辻本学 (産総研) 「高温超伝導体単結晶の積層固有ジョセフソン接合系におけるテラヘルツ発振現象の研究」

② 竹森那由多 (阪大 QIQB) 「準周期系に特有な電子相関と超伝導状態に関する理論研究」

3 日本物理学会 学生優秀発表賞 (杉本)

(ア) 秋季大会 (2021 年) 受賞者

① 液体金属：藤井海里 (名工大院工)

② 超低温：限下敦貴 (兵庫県大院理)

③ 準結晶：堀眞弘 (東理大理)

④ 超伝導・密度波：前垣内舜 (東工大理)

⑤ 超伝導・密度波：佐藤優大 (東大物性研)

4 領域 6 学生優秀発表賞に関する規約について (杉本)

(ア) 2021 年秋季大会インフォーマル・ミーティング (以下、IM とする) において、領域 6 学生優

秀発表賞規約における『講演申し込み時の「学生優秀発表賞に応募する/しない」の選択肢に関わらず、一般講演で口頭発表する学生全員を審査対象とする』という文言に関して、以下のよう意見が寄せられた。

- ① 何らかの意思・事情に基づいて「応募しない」を選んだ講演までを強制的に審査対象として良いのか（発表賞審査を受けることを自主的に辞退する権利はないのか）
- ② 「応募する」を選ばなかった講演については、発表者が学生であるかどうか1件1件手作業で（研究室 HP を調べるなど）確認する必要性が生じ、運営委員に多大な労力がかかってしまう
- ③ 上記の赤字部分は現在の実施要綱中に明文化されていないため、講演者のみならず運営委員も誤認識をしたまま審査を進めてしまう可能性が常にあり、混乱を招く恐れがある

(イ) 前回の IM の議論を踏まえ、各分野で意見集約を行った結果、さらに以下のような意見が寄せられた。

- ① 受賞人数が審査対象者の 10%程度とされているので、受賞者を出すには最低 10 人程度必要である。審査対象者を多くするために、「応募する/しない」の選択肢に関わらず、一般講演で口頭発表する学生全員を審査対象とするようになった。
- ② 競争性の観点から自動的に審査対象とするが、当人の意思で、“受賞”を辞退できることにすれば良い。受賞者に通知する際に、受賞を希望しない場合は、辞退する旨の返信をしてもらう。辞退があった場合の繰上げはしない。
- ③ 領域 6 の HP での記載と、実施要項での記載が異なっているのは良くなく、整合させたほうが良い。
- ④ 実施要項に記載されている採点基準や採点が実際の実施方法と若干異なっているのではないかと？例えば、実施要項では、1~6 までの 6 段階で採点すると記載されているが、実際は（準結晶分野では）小数点第 1 位までの刻み幅で採点されている。採点方法に関して、分野間で統一し、実施要項にこの詳細を明記するか、分野間で比較的自由に運用できるよう実施要項の文言を修正すべきではないか？
- ⑤ 「受賞回数に関して制限は設けない」と実施要項では記載されているが、複数回受賞が多くなると賞の価値が下がることはないか？
- ⑥ 実施要項に書かれている審査基準は絶対評価になっているが、審査委員によってその割合にはばらつきがあり、平均や標準偏差が統一されないために、審査委員間で、賞選出への影響度に差が生じる。審査委員ごとの影響度を揃えるために、各審査委員の採点における点数分布の割合を予め定めておいてはどうか？
- ⑦ 申し込み時に「応募する/応募しない」を選択する形から、「学生は自動的に賞の対象となるが、特に審査を辞退することを希望する場合はその意思を示す」形に変更してはどうか？
- ⑧ 分布を決めて相対評価するという方法は審査もしやすく、審査委員によるばらつきを回避する方法になりうる。ただし、審査者がある程度、全体にわたって審査するという前提が無いと、別の意味のばらつきが生まれる。それを避ける為に、審査を依頼する際に「対象の何割以上を審査してください」というお願いをした方が良い。

(ウ) 今回の IM での意見

- ① 学生講演者全員を審査対象としているが、受賞が決まった後で受賞を辞退する機会を設けるとよいのでは
- ② 学生が受賞を辞退するという状況があり得るのかが疑問
- ③ 現在の運用では審査対象となることを拒否する権利がないので、受賞者が決まった後で確認を取り、辞退する機会を与えるようにするとよいのでは
- ④ 学生が一般講演で申し込んだときは審査対象にならないので、それがわかるように実施要領を変更するとよいのでは
- ⑤ 学生講演者全員を審査対象にするという記述をやめて、学生数に応じて各分野の運用に任せるとよいのでは

(エ) 今回、意見集約を行った結果、改訂が必要であるか否かも賛否が分かれたので、これも含め今後の審議事項となった

(オ) ただし、次回の学生優秀発表賞の運営では、ホームページ記載の『一般講演申込の「学生優秀発表賞の応募」欄での応募の有無のチェックに関わらず』という文言の扱いに関しては、各分野の裁量に任せることとなった

5 領域会議 (11/25) 報告 (乾)

(ア) 第 77 回年次大会 (2022 年) 招待・企画講演, シンポジウム講演の採択結果

- ① 招待講演: 10 件 (内, 物性 7 件) 採択
 - ② 企画講演: 8 件 (内, 物性 0 件) 採択
 - ③ チュートリアル: 5 件 (内, 物性 5 件) 採択
 - ④ シンポジウム (一般): 15 件 (内, 物性 9 件) 採択
 - ⑤ シンポジウム (共催): 4 件 (内, 物性 3 件) 採択
- ※不採択 0 件

(イ) 招待・企画講演, シンポジウム講演申請に関する以下の注意事項が述べられた

- ① 内容説明が十分な提案書の作成
- ② 締切後の提案は原則認められない (運営委員に早めに知らせる)
- ③ 非会員を招待する必要性・理由について追記, 非会員登壇者に物理学会へ入会の勧誘
- ④ 共催シンポジウムの活用
- ⑤ シンポジウム講演の位置付け

ある一つのテーマに沿って, そのテーマを代表する研究者が様々な角度から一般講演とは違った時間枠で講演する。

⑥ 内容説明

(イ) テーマが何かを明確に読み取れるように説明する。

(ロ) 全ての講演者について, 講演内容とテーマとの関係を説明する。

(ハ) 「主題名」, 各講演者の「講演題目」もテーマを意識した名称にする。

- ⑦ 所属重複規制 (特に提案者) について理解する。
- ⑧ 合同領域は事前に連絡, 確認する。領域会議でも追加可能。
- ⑨ 運営委員, 代表は提案書をチェックする。

(ウ) オンライン大会の定期的開催について

① 審議事項の説明

(イ) オンライン開催は感染症対策のために始めたが、「スライドが見やすい」、「旅費をかけずに参加できる」、「海外からの参加者が見込まれる」など、多くの利点があることがわかった。

(ロ) 会場を提供することによる会員の負担を減らすことができる。

(ハ) 現地開催での直接の人的交流は研究発展のために必要不可欠であるが、オンライン開催の利点を鑑み、理事会では、感染症が終息した後においても、オンラインを一つの開催形態と積極的に捉え、定期的なオンライン開催の可能性を検討している。

② 以下のような意見が出された

(イ) 年会の方が大規模なので、年会をオンラインにした方がよいのでは

③ 意見は 4/18 提出する予定なの今月中にメールで追加意見を募集する

(エ) 学会発表英語化に関する理事会提案について

① 留学生や外国人参加者への配慮のための英語化に協力することには賛同は得られたものの、各領域からは以下のような意見が上がり、本会の結論としては、理事会提案の文章では領域委員会の賛成は得られず、秋以降も継続審議ということとなった。

(イ) 協力レベルということであれば反対ではないが、領域ごとに事情が異なるので、ある程度は領域の裁量に任せてほしい。

(ロ) 英語化の目的が「留学生や外国人研究者への配慮」であることは理解できるが、「学生への教育」は理解できない。

(ハ) 「推奨する」という文言は、実質強要しているのと同じなので表現を変更してほしい。英語化を押し進めていくという趣旨の文章の場合は賛同できない。

(ニ) 領域内で賛成の意見は少なくないものの、反対する方は強い意見を持っている。

② 英語化を強要するようなことは行わないので、今後は各領域で対応すること説明された

6 一般講演発表件数の推移・概要提出率について (杉本)

(ア) 領域 6 の発表者数は前回とほぼ同じ

(イ) 学生の発表数も前回とほぼ同じ

(ウ) 領域 6 の概要提出率は物性全体の平均程度で、例年通り

7 国際会議などのお知らせ (杉本)

(ア) Aperiodic 2022 : 高倉洋礼 (北大工)

(イ) LAM18 : 乾雅祝 (広大院先進理工)

(ウ) LT29 : 坪田誠 (大阪市立大)

(エ) ULT2022 : 白濱圭也 (慶応大)